●問い合わせ先
箱根町教育委員会　TEL 0460-5-7600

この道を行く

東海道―箱根旧街道
（神奈川県―静岡県）

箱根旧街道 畑宿一里塚

江戸時代の初期、徳川幕府は街道を往来する旅人の目印として、街道の一里（約四㎞）ごとに「一里塚」と呼ばれる土を盛り上げた塚を築いた。

箱根旧街道石畳の両側に残る畑宿の一里塚は、江戸日本橋から数えて、二三里目に当たり、神奈川県箱根町の中では、湯本茶屋、畑宿、箱根の三か所にあった一里塚の中で、唯一、その形態をとどめるものである。

山の斜面にある畑宿の一里塚は、斜面上部の土を削って下部側にならし、平坦な面をつくり、さらに斜面の下部に石を貼って山留めとする。そして、その上に、直径約九ｍの円形になるよう石積みを築き、その内部に礫を積み上げ、表面に土を盛って、頂上部に標識樹を植えた構造であるということが、発掘調査により判明した。

平成一〇年一二月に完成した保存整備では、発掘調査で判明した一里塚の構造を復元し、標識樹として、文献調査の成果により、塚の頂上部に、畑宿から見て右側の塚には樅の木を、左側には欅の木を植えた。

（神奈川県箱根町教育委員会社会教育課
文化財保護係長　伊藤　潤）

保存整備の終わった一里塚

●問い合わせ先
栃木県教育委員会文化財課　TEL 028-623-3460

この道を行く

日光杉並木街道

日光杉並木街道
（栃木県）

日光は勝道上人の日光開山に始まり、江戸時代、徳川幕府により栄華を究めた歴史と文化の香り高い地で、「日光杉並木街道」もその歴史の重さを感じさせる貴重な文化財である。

この並木は、日光東照宮への参道を整備した際、徳川家の家臣であった松平正綱公により日光街道、例幣使街道、会津西街道に植栽されたもので、我が国で唯一、国の特別史跡・特別天然記念物の二重指定を受けている。

また、並木の総延長は三七kmにも及び、世界で一番長い並木道として、ギネスブックにも掲載されている。

植栽の開始は寛永二年（一六二五年）で、当時、植えられた杉は二万四〇〇〇本といわれているが、並木を通過する車両の増加や並木周辺の開発により毎年多くの杉が枯れたり倒れたりしており、今では一万三〇〇〇本程度となってしまった。

栃木県では、国、日光市、今市市、日光東照宮などの関係機関と連携を図りながら、杉並木の保護に取り組んでいる。春から秋にかけて、多くの人が散策を楽しんでいる。

（栃木県教育委員会文化財課長　長島重夫）

長身の杉ばかりで、景観に優れている

日光市野口～今市市瀬川間の並木は「長並木」と呼ばれている

撮影場所：栃木県今市市瀬川地区

●問い合わせ先
和歌山県教育委員会　TEL 0734-32-4111

この道を行く

熊野参詣道
（三重県―和歌山県）

熊野参詣道　紀路

「蟻の熊野詣」で知られる熊野参詣道は、熊野権現の加護を願い熊野三山（熊野本宮大社・熊野速玉大社・熊野那智大社）へ参拝する平安時代に拓かれた参詣道である。沿道には熊野九十九王子が祀られ、熊野古道とも呼ばれている。

熊野参詣には紀路と伊勢路がある。紀路は、都の下鳥羽から淀川を下り摂津・渡辺の津へ上陸、上町台地を経て和泉国を南下し、和泉・紀伊国境の雄の山峠を越えた。

中辺路と大辺路の分岐点、田辺市までは藤代峠、石畳が美しい鹿ケ瀬峠、千里の浜に祀られた千里王子などが親しまれている。中辺路をとれば、滝尻王子・近露王子を経て、これより熊野の聖城には入るという発心門王子、つぎに伏拝王子にいたる。遥か山並みの向こうに本宮の熊野坐神社を遥拝し、山道を下れば熊野川の川岸にかつて鎖座した旧社地に至る。新宮の熊野速玉大社からは熊野灘を見ながら高野坂をとり、浜の宮王子などを経て大門坂に至る。鬱蒼とした大杉並木の石畳路を登れば那智大滝がシンボルの熊野那智大社に詣でる。健脚向きには、那智原始林を見ながら山道を登り熊野灘を見下ろす舟見峠を越え、本宮へ戻る参詣道、大雲取越え・小雲取越えをお勧めしよう。

現在、熊野体験博が開催されており、皆様に是非熊野を体験していただきたい。

（和歌山県教育委員会文化財課主幹　藤井保夫）

熊野参詣道・大門坂（那智勝浦町）

●問い合わせ先
玉名市立歴史博物館　TEL 0968-74-3989

この道を行く

菊池川水運

菊池川水運
（熊本県玉名市高瀬―大浜）

菊池川の流域は肥後最大の穀倉地帯で、有明海に注ぐ川口の港町高瀬は古代・中世と菊池氏をバックに海外貿易で繁栄した。

鎖国後、肥後藩は全国一の四〇万俵を大坂に積み出し、その半分は高瀬から出た。

鹿児島本線高瀬鉄橋のすぐ下手、俗称俵転がしの渡頭（とと）が面影を留（とど）める。四〇俵積みの平田舟で年貢米を積み下し、渡頭の石段を担ぎ上げ、藩の御蔵に納める。大坂の相場を見ては、急いで石畳坂道を転がして積む。

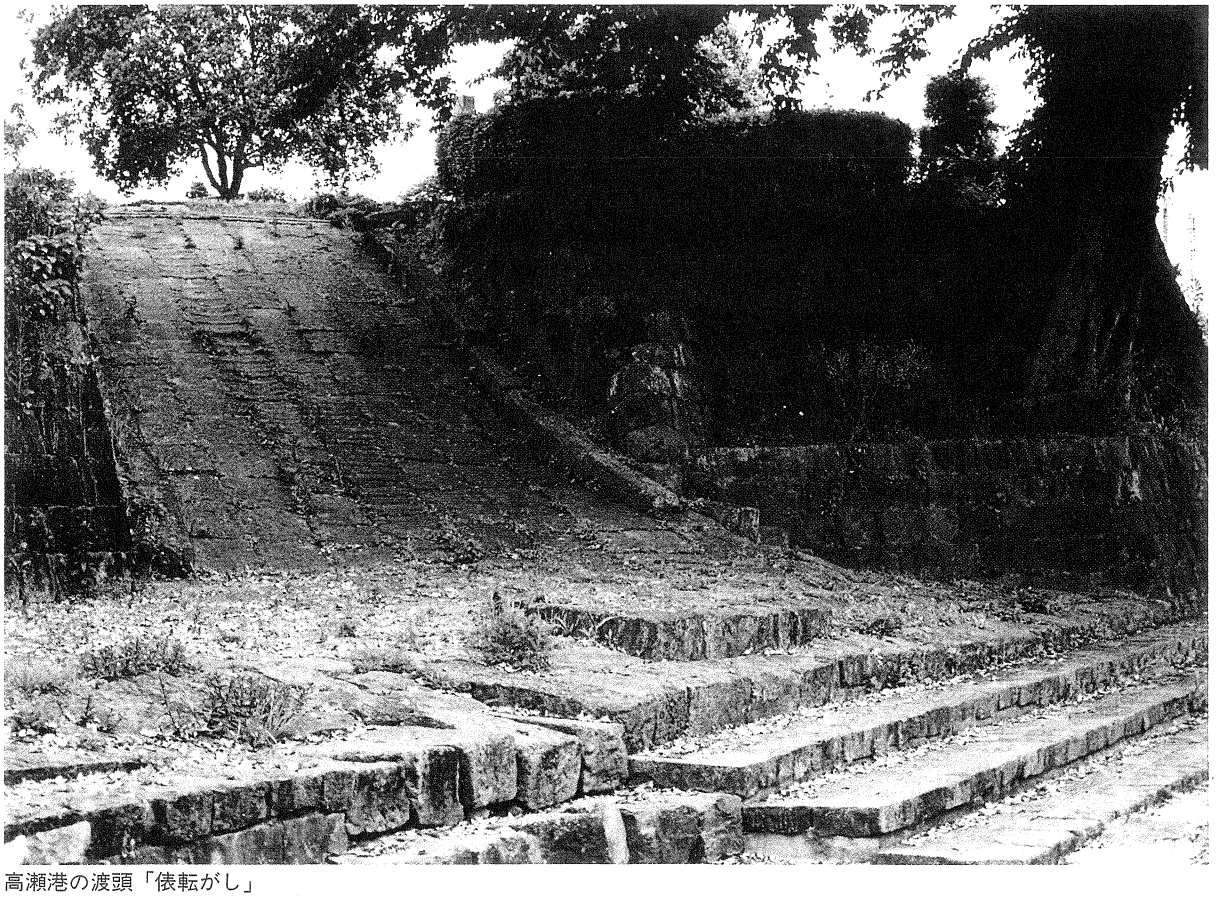
御蔵・御茶屋は西南の役で焼け落ちたが、町並みの半分は焼け残る。町の入り口に架けられた眼鏡橋や、商家が各自築いた裏川筋の高石垣は立派で、裏川は菖蒲公園となっている。

大型廻船が接岸できなくなったが、歴史的な高瀬の町は移せない。三㎞下流の大浜町を外港とした。大浜には川に突き出た番所跡が残り、外島宮には廻船模型が奉納され、町並みや廻船群を描いた大絵馬が大坂の長門屋吉兵衛から寄進されている。

途中の川筋には加藤清正が普請したと伝える数十の石垣の刎（は）ねが突き出て河流を調整し、堤防に植えられた櫨（はぜ）並木の古木は紅葉が美しい。

玉名温泉に近い玉名市立歴史博物館は河川交通として「歴史の道百選」に選ばれたこの川と港をテーマに展示している。

（玉名市立歴史博物館
館長　田邉哲夫）



高瀬港の渡頭「俵転がし」

●問い合わせ先
宮城県教育委員会文化財保護課　TEL 022-211-3681

この道を行く

出羽・仙台街道
（宮城県―山形県）

出羽仙台街道中山越

仙台藩領内の交通路の整備は伊達政宗が山形県米沢から宮城県岩出山に移った天正一九年（一五九一）から始まる。

出羽仙台街道は、奥州街道吉岡宿（宮城県大和町）から分かれて、中新田、岩出山、鳴子、境田（山形県最上町）を経て羽州舟形（舟形町）に至る峠越えの道である。岩出山を起点とし、やがて仙台藩の中心となる宮城郡国分地方のみならず、江戸・上方に通じる道路として整備され、仙台への移転後は、領内北部から出羽諸藩に通じる主要な街道として重視された。

慶長九年（一六〇四）には幕府から奥州の街道に一里塚の築造を命じているが、出羽街道にもいくつか一里塚が現存しており、江戸日本橋を起点とする里数が奥州街道と連結して数えられていることを示している。

出羽街道は、仙台藩士の公用路であったが、大名の参勤交代に利用されることもなく、物資輸送も鳴瀬川水系あるいは小野田・古川・三本木方面に分かれたため、領内の地方道にとどまったといえよう。

元禄二年（一六八九）、奥州行脚に出立した松尾芭蕉は、平泉（岩手県平泉町）から引き返し、出羽の雄花沢（山形県尾花沢市）に出ようとしてこの道を通ったと「奥の細道」に書いている。

鳴子町内は旧道がよく遺存していることから、昭和五三年から五六年にかけて環境整備が行われたのち、平成二年に国史跡に指定された。

（宮城県教育委員会文化財保護課技術補佐　加藤道男）

芭蕉ゆかりの尿前の関跡

街道の難所小深沢から大深沢へと続く

撮影場所　宮城県玉造郡鳴子町）

この道を行く

上ノ国祖廟詣の道

●問い合わせ先
上ノ国町教育委員会文化財課　TEL01395-5-2230

福山街道
（北海道）

永正一一年（一五一四年）、上ノ国の勝山館から松前大館に本拠を移した蠣崎氏は、後に姓を松前とし慶長一一年（一六〇六年）、新たに館を築き福山館（城）とした。以来、松前とその城下は『福山』・『福山城下』とも呼ばれた。

歴代の藩主は封を継ぐと必ず、また藩の重大事のたびごとに初代武田（蠣崎）信広の眠る西部上ノ国の地を訪れた。これを『上ノ国の祖廟詣』・『上ノ国詣』と言う。また、松前藩では毎年正月、重臣を藩主名代として上ノ国三社（毘沙門天王社・館神八幡宮・夷王山神社）へ参詣させる代参行事が恒例であった。

福山から上ノ国まで一七里二〇丁、日本海沿いに北上するこの道は、幕府巡見使を始め多くの文人墨客、旅人が江差へ、そしてその北へと歩を進めた道でもあった。上ノ国村の南村境、よしか沢辺りから山手へ上がり、八幡牧野、赤坂の古戦場、足洗川などの伝説の地を辿り夷王山々麓、勝山館跡を経て上ノ国市街へと到る道筋は、その近道としてしばしば利用されている。

近年の史跡上之国勝山館跡の発掘調査により、上ノ国市街地・夷王山間の道は戦国時代には館の中央通りであり、藩主祖廟詣に先立ち改修された跡の残ることも分かった。古くから代参道路・表道と呼ばれた道の所以である。

毎年六月、町スポーツ少年団の松明行列がこの道を夷王山々頂へと目指す。

（上ノ国町教育委員会
文化財課主任学芸員　松崎水穂）

木漏れ日を浴びながら
代参道路を行く

整備された勝山館跡頂部館神八幡宮跡

●問い合わせ先
京都府教育委員会文化財保護課　TEL 075-414-5901

この道を行く

宮津街道―普甲峠越え

宮津街道―普甲峠越え
（京都府）

近世初頭、宮津藩主の京極高広が、普甲山の東の鞍部を通っていたそれまでの道にかわり開いたものと伝え、府道などにより数個所で分断されながらも、宮津市小田の通称岩戸（がんど）から大江町佛性寺の鬼茶屋付近まで、良好に古道が残っている。

地元では京街道と呼ばれ、大江町河守を経て、福知山で山陰道と合し、京に至る。宮津藩主が参勤交代路として使用し、茶屋も置かれていたという。貝原益軒が天橋立に遊んだときにこの峠を越え、山間に三か所の茶屋があり、京極高広が旅客のために置いたものであると、その道中記に記している。

道の随所には今も石畳が残り、峠付近の道際には、土塁で囲まれた平坦地などが認められる。その施設の詳しい性格は不明であるが、幕末期に普甲峠などに関所や胸壁を作らせたとの記録があり、或いは、そうしたものに関（かか）わるものかとも思われる。

現在、古道の目印としては、宮津市小田の通称岩戸の府道際に宮津市が立てた説明板があり、少し旧道を登ると石畳が残っている。また、大江町佛性寺の鬼茶屋付近の古道は、石畳が敷き直されているが、案内板などがあり、散策を楽しむことができる。

（京都府教育委員会
文化財保護課　山口　博）

宮津市小田の岩戸から峠に至る間に残る石畳道

●問い合わせ先
長野県教育委員会文化財・生涯学習課　TEL026-235-7440

この道を行く

中山道和田峠 永代人馬施行所

中山道―和田峠
（長野県）

江戸時代初期、中山道は徳川幕府直轄の街道として整備され、東海道とともに、江戸と京を結ぶ幹線道路として、諸大名の参勤交代はもちろん、庶民の往来に利用された。

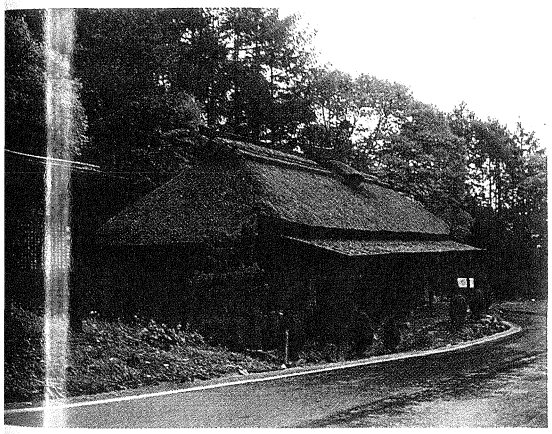
江戸日本橋から二八番目の和田宿を出立し、標高一五三一mの和田峠を越え、九十九折の急坂を下って下諏訪宿までの五里一八町（約二二km）は、中山道随一の長丁場であり、難所であるといわれた。

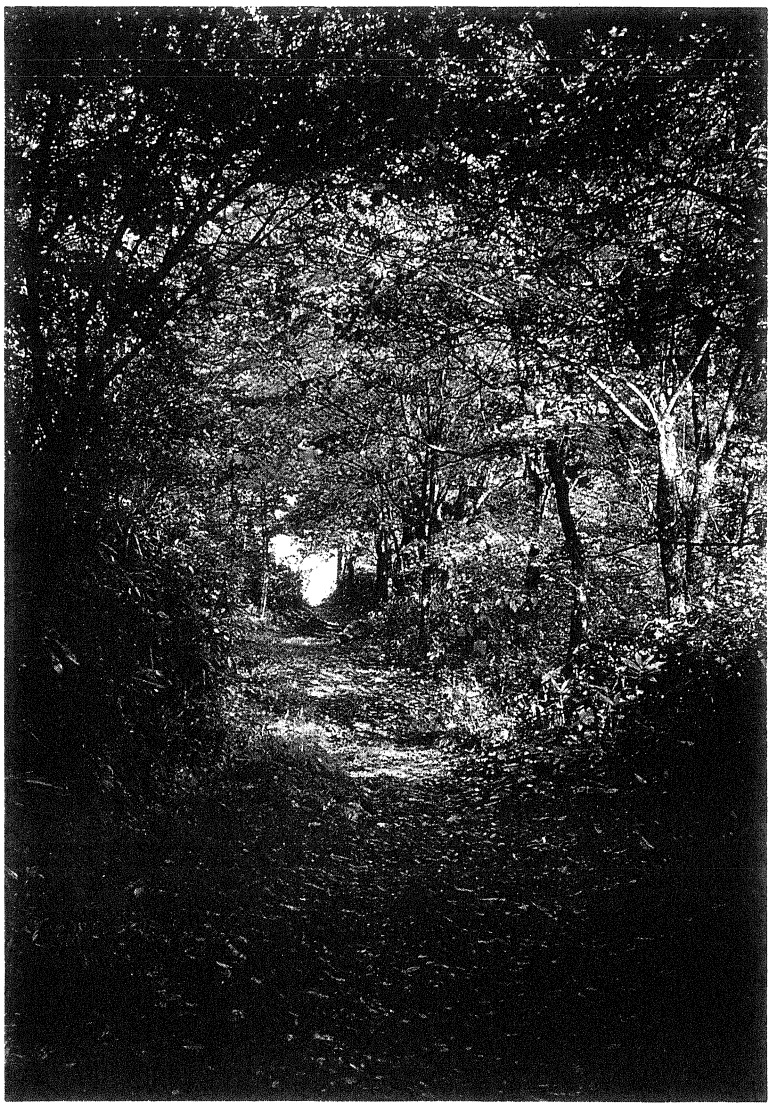
幕府は、東餅屋、西餅屋を険しい坂路の休息所に定め、さらに一八二八年（文政一一）、江戸馬喰町の豪商かせや与兵衛の寄付金を元手に、間口二〇間、奥行五間、茅葺き寄棟造りの永代人馬施行所（接待）を設置した。

庶民は中央の広い土間、身分のある者は板戸に囲まれた座敷で旅の疲れを癒した。また冬場ともなれば、旅人に熱い粥一椀、牛馬には小桶一杯の飼葉が施された。温かな接待に励まされ、峠を越える人馬は湯の香漂う下諏訪宿へと急いだのである。

昭和五三年から行われた「歴史の道整備事業」によって、永代人馬施行所をはじめ、和田宿本陣や旅籠かわちや（歴史の道資料館）などが復元整備され、昭和六二年、国史跡に指定された。

（長野県教育委員会文化財・生涯学習課
埋蔵文化財係指導主事　平林　彰）


永代人馬施行所（接待）


史跡中山道　和田峠

●問い合わせ先
北川村教育委員会　TEL 0887-32-1223

この道を行く

土佐街道―野根山街道
（高知県）

野根山街道

宿屋杉

古代における土佐国の国府と都を結ぶ道が南海道である。

養老二年（七一八）まで土佐国の国府へは四国では阿波国から伊予国を経由していた。続日本紀にこの経路があまりにも迂遠であるため、阿波国から直接土佐国に入る官道が開かれたという記載がある。このルートについては諸説あるが、江戸期に至っては野根山越えの道に一里塚が築かれ土佐国内の市要街道として利用されている。

野根山街道は、県東部の奈半利町から東洋町に至る延長三五kmの総称であり、各時代の歴史を育んだ道である。

現国・県道と遠く離れた尾根伝いの道であるがゆえに往時の姿をとどめた貴重な古道であり、平成八年、文化庁から「歴史の道百選」に選定されている。

参勤交代の昔をしのぶ朝休み場、お茶屋場や装束峠の敷石、宿屋杉、岩佐の関所跡、屋敷跡の石垣や墓地等、多くの史跡や土御門上皇が名付けたという岩佐の清水、旧藩林など自然環境に富んでいる。

なかでも、宿屋杉は惜しくも室戸台風（昭和九年）で倒壊したが、かつて周囲一六・六m、高さ三二m樹齢千年以上で、旅人が一夜をしのいだと言われ、今でも根近くの空洞は寝泊まりできるほど大きい。

（高知県教育委員会
文化財保護室　濱田眞尚
文化財班主任）

往時を想起させる宿屋杉

●問い合わせ先
福島県教育委員会文化課　TEL 024-521-7787

この道を行く

万世大路大滝宿跡

万世大路―栗子峠越
（山形県―福島県）

万世大路は福島と米沢を結ぶ新たな道路として明治一〇年に着工され、一四年八月に中野新道として竣工した。一〇月には東北巡幸中の明治天皇をお迎えして開通式を行い、一五年に万世大路と命名された。

その後、昭和八年に改修工事が行われ、四〇年代初めまで幹線道路として使用されてきたが、現在の国道一三号が開通して幹線道路はそちらに移り、平成八年には旧道が「歴史の道百選」に選定された。

大滝宿跡へは、福島市飯坂町中野の長者沢で国道一三号大滝橋の下に出て旧道に入り西に向かう。大滝川にかかる大滝橋から先が大滝宿跡である。橋のたもとには昭和初期の石碑・灯篭・祠がある。橋を渡ると左手に宿の鎮守である山神神社が祀られている。さらに道を西に進むと、沢が小川に落ち込むいら沢橋を経て「明治天皇鳳駕蹟碑」のある小集落にでる。この間から集落の西の、国道一三号西川橋の下までが旧道の面影をもっとも良く残す場所である。西川橋より西は国道一三号大滝第二トンネルの西に出るまで続いているが、現在は藪化しており、時折山菜・茸取の人が通るのみとなっている。

（福島県教育委員会文化課
専門文化財主査　木本元治）

万世大路大滝宿跡入口

●問い合わせ先
埼玉県教育委員会生涯学習部文化財保護課　TEL048-830-6987

この道を行く

鎌倉街道―上道

鎌倉街道―上道
（埼玉県）

政治の中心が鎌倉に置かれ、鎌倉への往来が盛んになると、鎌倉と地方を結ぶ道が重要な交通路として発達した。これを鎌倉街道という。鎌倉街道と呼ばれる道は数多くあるが、その名称は近世に成立したものである。

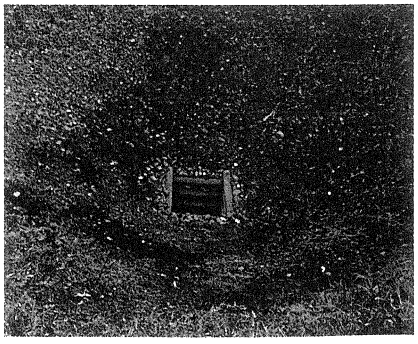
中世にも鎌倉へ向かう道はいくつかあったと思われるが、『吾妻鏡』、『梅松論』、『太平記』などの史料から、鎌倉から北へ向かう「上道」、「中道」、「下道」と呼ばれる道の存在が知られている。その南端は鎌倉であるが北端ははっきりしない。埼玉県内のほぼ中央を通過する「上道」は、群馬県藤岡市から埼玉県神川町に入り、寄居町、嵐山町、毛呂山町、狭山市、所沢市、東京都府中市を経て鎌倉へ向かう。特に「上道」は道の遺構や城館跡、神社仏閣、板石塔婆、井戸跡、古戦場など多くの文化遺産を残している。

ひとたび鎌倉に異変がおきると、武士たちは武装して鎌倉街道を通って鎌倉に馳せ参じた。「いざ鎌倉」である。鎌倉街道は武蔵武士を代表する畠山重忠をはじめ、多くの武将たちが栄枯盛衰の物語を刻みつけた道であった。

しかし近世における五街道の整備とともに、鎌倉街道の多くは幹線道路としての使命を終え、多くは農道や林道、田畑、山林に改変された。

（埼玉県教育委員会生涯学習部文化財保護課
民俗文化財・記念物担当　宮　昌之）

毛呂山町大類付近の鎌倉街道


狭山市北入曽の「七曲井」、建仁２年（1202）と伝える

●問い合わせ先
島根県教育委員会文化財課　TEL 0852-22-5879

この道を行く

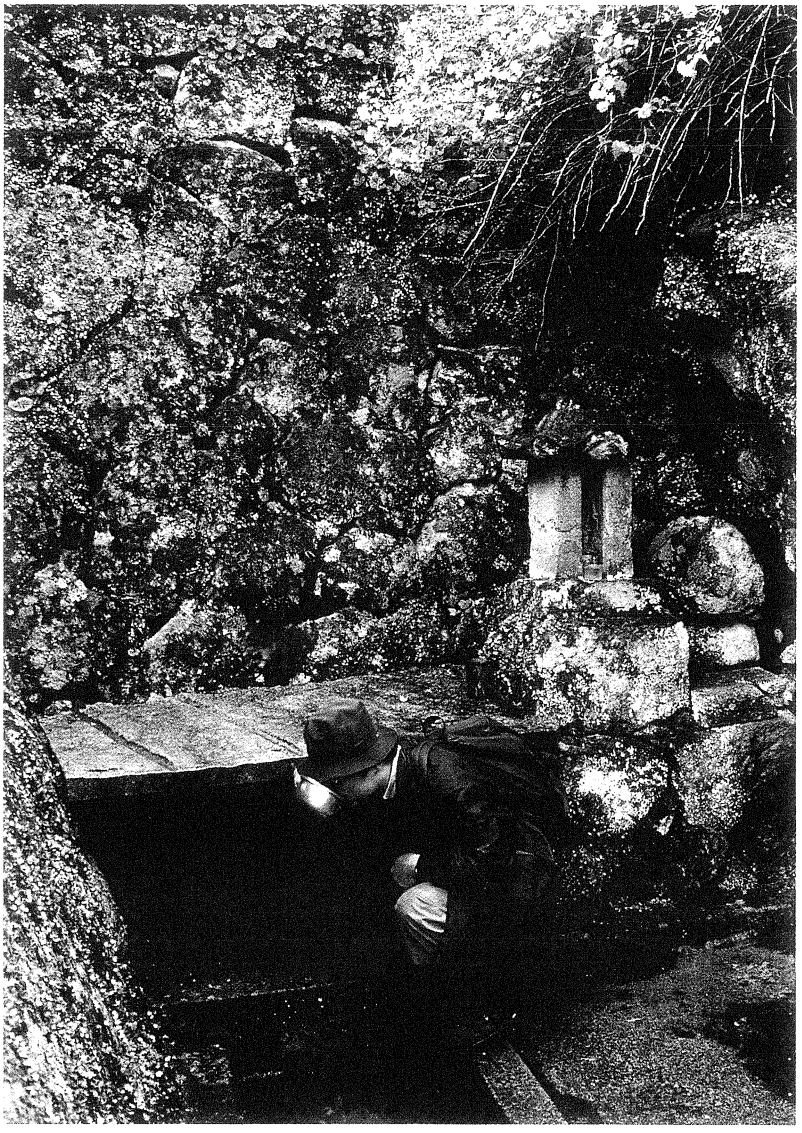
銀山街道
（島根県）

銀山街道金柄杓の泉

一六世紀後半、最初のピークを迎えた石見銀山の争奪を巡り、尼子、毛利、大内などをはじめとする周辺の武将たちは激しい戦いを繰り広げた。また、同時にこの時期が「大航海時代」でもあったために、石見銀山の銀は世界の注目を浴びることになった。そして、石見銀山で培われた「灰吹法」という新しい精錬技術が、日本の鉱山開発に大きな影響を与えることになった。

銀山街道は、銀の積出港であったとも言われる温泉津と石見銀山を結ぶ街道である。最盛期の慶長～寛永期（一七世紀前半）には、銀山内に数万人の人口を擁していたと推定されており、大正時代に閉山するまでのおよそ四〇〇年間、大量の物資がここを通ったはずである。現在でも、標高四〇〇m近くの険しい降路坂を超えるおよそ一〇kmの道中には、石畳や道標をはじめ、五〇〇を越える間歩（坑道）、城跡、「金柄杓の泉」と呼ばれる泉、番所等が点在し、往時の姿を良好に保存している。また、重要伝統的建造物群保存地区に選定されている大森・銀山の街並みなどに、銀山が繁栄していた頃の面影が残されている。

（島根県教育委員会文化財課主幹　若槻真治）



旅人たちののどを潤した金柄杓の泉

この道を行く

●問い合わせ先
沖縄県教育委員会文化課　TEL098-866-2731

国頭・中頭方西海道
（沖縄県）

国頭（くにがみ）・中頭方西海道（なかがみほうさいかいどう）

琉球王国では第一尚氏（しょうし）王統の尚巴志（しょうはっし）王（在位・一四二二～三九年）の頃（ころ）に、すでに道里制や駅制がしかれていたという。そして一五世紀後半以後の第二尚氏時代には、海上を含むすべての道が「首里に通ずる」ようになっていた。

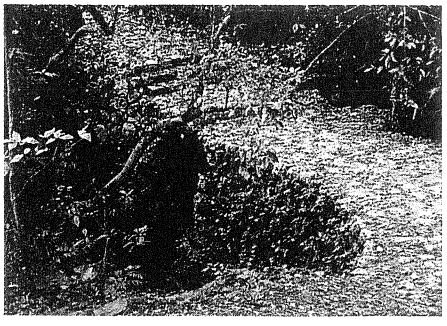
国頭・中頭方西海道は王都・首里から延びる「五街道」の一つで浦添（うらそえ）を経て、読谷山（ゆんたんざ）、恩納（おんな）、今帰仁（なきじん）と西海岸沿いに北上する主要道路であった。現在は、文化庁、沖縄県の補助・指導の下に浦添市と恩納村で「歴史の道」として保存整備や活用事業が進んでいる。

今回紹介するのは国頭・中頭方西海道のうち恩納村の部分である。恩納村は那覇市から約五〇kmの距離にあり、全村域が「沖縄海岸国定公園」に指定されている美しい海とリゾートホテルで有名な村である。また国指定史跡「仲泊（なかとまり）遺跡」や県指定名勝「万座毛（まんざもう）」などの文化財も多い。

恩納村の「歴史の道」は平成六年度で保存修理事業が終了した。現在は仲泊遺跡から真栄田の一里塚までの間約三・五kmが「歴史ロードを歩こう」などの事業に活用されている。沿道は琉球松やシマトネリコなど南国独特の植物に囲まれ、森林浴も楽しめる。

（沖縄県教育委員会文化課史跡整備係。指導主事　高嶺朝誠）

「歴史ロードを歩こう」の様子



山田谷川（さくがわ）の石矼

●問い合わせ先
山梨県教育委員会学術文化財課　TEL 055-223-1791

この道を行く

富士吉田口登山道

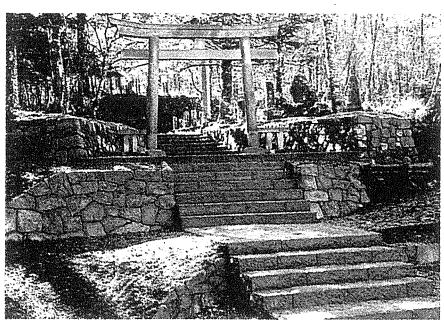
富士吉田口登山道
（山梨県富士吉田市）

富士山はその優美な姿で多くの観光登山者を惹き付ける「観光の山」として広く知られている。その一方で富士山の歴史、特に神仏の宿る神聖な霊山として古来から崇められてきた「信仰の山」としての長い歴史があることは意外と知られていない。

ここに紹介する富士吉田口登山道は、富士吉田市金鳥居から富士山頂に鎮座する久須志神社に至る約一八・五kmを指し、古代末以降に見られる富士山への入山信仰（特に江戸期に降盛した「富士講お山参り」）の主要なルートとして利用され続けた道である。しかし、昭和三九年に富士山有料自動車道が開設されたことによって、この道のそれまでの活況は影を潜めてしまった。ただし、沿道に遺された石造物や施設などは長い富士山信仰の歴史の証しとなるものであり、平成八年には「文化庁歴史の道百選」に選定されるに至ったのである。この選定を契機に富士吉田市では整備事業を計画実施することとなり、沿道の文化財整備や道の補修などの事業を積極的に展開している。整備された道には、自動車登山では味わうことのできない富士山の歴史や豊富な自然環境を求める人々の姿が次第に戻りつつある。

（山梨県教育委員会山梨県埋蔵文化財センター主任文化財主事　森原明廣）

整備の進む富士吉田口登山道



整備された馬返し地点の石鳥居

この道を行く

●問い合わせ先
山形県教育委員会文化財課　TEL023-630-2880

羽州街道―金山峠越
（山形県―宮城県）

羽州街道 金山峠越

羽州街道は陸奥国桑折で奥州街道から分かれ、山中七つの宿（宮城県七ケ宿町）を経て、当時難所で知られた金山峠を越えると出羽国に入る。

江戸時代初期までの金山峠は道幅も狭く足場も悪かったため、馬や駕籠を利用する参勤交代の行列の通行には適さなかったようだが、明暦二年（一六五六）、上山藩主土岐頼行により大改修が行われると金山峠を通る大名も年々増え、庄内藩主酒井氏や秋田藩主佐竹氏など日本海側諸大名の参勤交代路として利用されるようになった。

峠の北の上り口に位置する金山郷は、出羽国南端の宿場楢下宿と陸奥国湯の原宿の間の宿として賑わいをみせ、元禄期には既に参勤交代や出羽三山詣りの旅人の交通路として重要な役割を果たしていたという。

しかし、明治になって新道が作られ鉄道ができると、旧来の峠道は行き交う人々もなく急激にすたれていった。道形は草木に覆われ、わずかに残る石碑や石垣、石畳がかつての姿を伝えるのみであったが、近年自然歩道として峠道が整備され、清々しい川音と美しい木立の中、往事の風情を偲びながら散策できるようになっている。

（山形県教育委員会文化財課主事　庄司壮哉）

整備された木道と鬱蒼と茂る木々。その趣は“羽州路難所”を彷彿とさせる

●問い合わせ先
鹿児島県姶良町教育委員会　TEL 0995-65-1553

この道を行く

東目筋・大口筋白銀坂
（鹿児島県）

近世の鹿児島藩では、大隅半島側を東目、薩摩半島側を西目、街道を筋と呼んでいた。

「大口筋」とは、鹿児島城下から重富―帖佐―加治木―横川―大口―「亀坂峠」（熊本県）までの全長約七〇kmの街道をさす。「鹿児島県史」によれば、「通常、大阪・江戸へ連絡するには、大口筋と出水筋では豊前小倉に、高岡筋では日向（宮崎）細島に出て、ともにそれより海路をとる」とある。

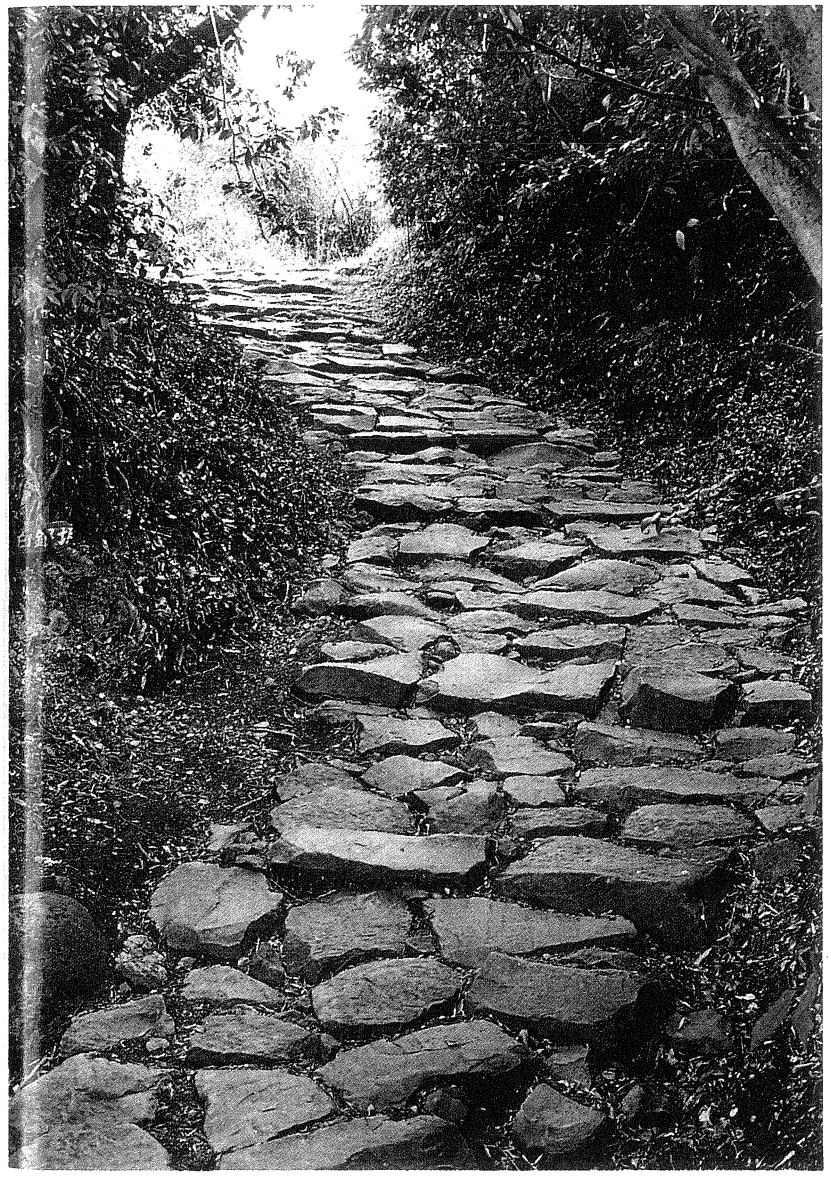
今回紹介する白銀坂は、姶良町脇元から吉田町牟礼ヶ岡までの峠の石畳道である。山中には古代における薩摩国と大隅国の国境が走る。

白銀坂の高低差は三〇〇m以上あり、中腹には七曲りと呼ばれる急勾配の難所が続く。石畳は今でも昔の面影をよく残しており、参勤交代の行列や名もなき旅人たちの往来が彷彿としてくる。

明治六年の海岸道開通以来、白銀坂は幹線としての使命を終え、長らく人々から忘れ去られていたが、最近「歴史の道」として脚光を浴びている。

姶良町では平成八年度から「歴史の道」整備を開始し、現在約一・三kmの保存修復を終了している。毎年五月に開催している「歩き・み・ふれる」ウォーキングは多くの参加者で賑わっている。

（姶良町教育委員会社会教育課文化係・主任主査　下鶴　弘）



保存修復した石道

「歩き・み・ふれる歴史の道―大口筋」鹿児島城から白銀坂まで16kmを77名が踏破した。（平成11年5月）

問い合わせ先
山口県教育委員会文化財保護課　TEL 0839-33-4655

この道を行く

赤間関街道―中道筋・雲雀坦越

赤間関街道―中道筋・雲雀坦越
（山口県）

赤間関街道は、長州藩の城下町萩と赤間関（下関）をつなぐ道で、中道筋、北道筋、北浦道筋という三つのルートがあった。このうち中道筋は、萩から明木（旭村）、絵堂（美東町）、秋吉（秋芳町）、大嶺（美祢市）、吉田（下関市）を経て赤間関に至る最も東側のルートに当たる。北道筋・北浦道筋の場合、街道沿いに俵山・川棚といった温泉場や観光名所としての古刹大寧寺などがあり、藩主の湯治や庶民の観光ルートとして使われることが多かったのに対し、中道筋は、最短距離で萩―赤間関をつなぐ藩の主要道として設定されており、公的に利用されることの多い道であった。

中道筋にある雲雀坦は、萩から美東町に至る県道沿いにあり、美東町と旭村の境に当たる。県道脇には、そこがかつての阿武郡と美祢郡の境であったことを示す「郡塚」が残る。「郡塚」は高さ八〇cm程の石造の三角柱で、その右側には「阿武郡明木村」、左側には「美祢郡赤郷村」と彫られている。

中道筋のうち、美東町から秋芳町に至る区間は「文化庁歴史の道百選」に選ばれており、雲雀坦はその起点にあたる。

（山口県文化財保護課文化財専門員　山崎一郎）

旭村側からみた雲雀坦

雲雀坦に残る郡塚

問い合わせ先
勝山市教育委員会生涯学習課　TEL 0779-88-1111

この道を行く

白山禅定道

白山禅定道（福井県）

尾根上に残る白山禅定道（白山伏拝付近。正面は白山）。

福井、石川、岐阜の三県にまたがる白山（標高二七〇二m）は、古来から神々の宿る聖なる山として多くの人々の信仰を集めてきた。

白山が開かれたのは養老元年（七一七）で、越前の僧泰澄によるとされる。白山登拝道である禅定道は、天長九年（八三二）に白山をとりまく三方から開かれたという。その三方とは、越前国では平泉寺（勝山市）、加賀国では白山本宮（鶴来町）、美濃国では長滝寺（白鳥町）であった。

その中でも越前側の白山禅定道は、泰澄が白山を開くに際し登ったと伝えられる道である。また、その起点としての平泉寺は、白山への信仰を背景に古代から中世後期にかけて北陸最大規模の宗教勢力に成長した。しかし、天正二年（一五七四）、一向一揆により焼亡、白山禅定道も廃道になった。

この白山禅定道は、全長約五五km。人々は、二泊三日の行程で白山の頂上に達したという。今も、道の各所には、宿泊所や行場を兼ねた室跡などが残る。

現在、禅定道の所々に崩壊部分があるため、登山可能区間は平泉寺から白山伏拝までの約一二km、市ノ瀬から白山頂上までの約一六kmとなっている。

近年、加賀側や美濃側の白山禅定道が整備されており、古道からの白山登山が可能となっている。

（勝山市教育委員会学芸員　宝珍伸一郎）

白山禅定道の起点平泉寺一帯は、国史跡。近年の調査では、中世の石畳道が検出されている。

●問い合わせ先
青森県教育委員会文化課　TEL 017-722-1111

この道を行く

奥州街道蓑ヶ坂

奥州街道―蓑ヶ坂・長坂・高山越（青森県）

奥州街道は馬淵川南岸の釜沢集落（岩手県二戸市）から沢を渡り、蓑ヶ坂（青森県三戸郡三戸町）の難所にかかる。沢が県境となっているが、江戸時代にはともに盛岡藩領だった。急坂は一口に六丁（六〇〇m余）といわれており、三〇分程で上部の駕籠立場に着く。道幅は三m弱、長年の放置と木材の搬出のため道筋はかなり荒廃し、沢に橋もない。

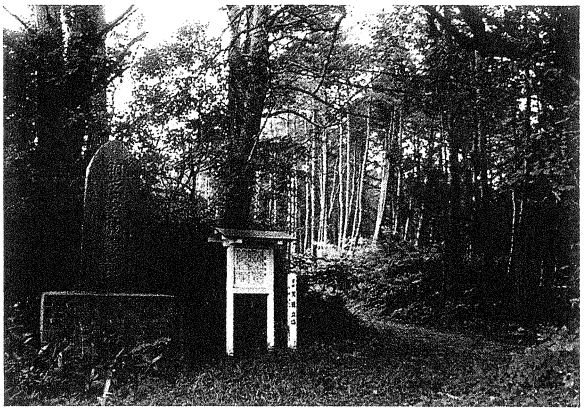
駕籠立場は旅人にとって格好な休息場だった。広場から馬淵川の雄大な景観が眺望でき、往時は茶屋もあったという。明治天皇も明治九・一四年の二度の御巡幸の際に休まれている。「明治天皇陛下」と記された記念碑には、明治九年七月車駕の後押しをした一〇人の姓名が刻まれており、坂道の厳しさがしのばれる。

駕籠立場から三戸方向に少し進むと、一里塚が一対木立の中に残る。蓑ヶ坂の地名は、この塚からやや離れた地点にある鞍沼の主が、雨の日に蓑に化けて坂道に立ち、これを身につけた旅人を沼に引き入れて殺した、という伝説にちなむ。

現在の国道は馬淵川の北側を通り、道路としての蓑ヶ坂の生命は終わった。しかし、「歴史の道百選」に選定された後、研究や散策で蓑ヶ坂を訪れ、急坂に足跡を印し歴史を楽しむ人影が増えている。

（青森県文化財保護審議会委員　佐藤　仁）

蓑ヶ坂　名久井岳と馬淵川を望む
奥州街道蓑ヶ坂の上部



駕籠立場　明治天皇御巡幸の記念碑（本文記述の碑は右側）のほか吉田松陰の碑もある。

問い合わせ先
群馬県教育委員会文化財保護課　TEL 027-226-4696

この道を行く

中山道―碓氷峠越え

（群馬県松井田町―長野県軽井沢町）

江戸日本橋から、本州中央部を縦断して京に至る中山道六十七次の中でも、碓氷関所とその奥に控える碓氷峠越えは、非常な難所のひとつであった。急坂を登る坂本宿から峠への道は、自動車道への転換になじまなかったので、非常に良く旧状を保っている。主要な街道であったため、近隣の峠道に比べて交通量が多かったと考えられるが、多くの石造物や伝承地などの存在が、そのことを裏づける様々なエピソードを伝えている。

山中にある歌碑のひとつには、

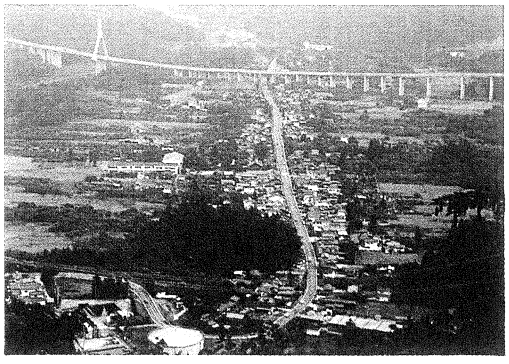
「八万三千八三六九二三四七一八二
四五十三二四六百四億四六」

とあるが、これは「山道は寒く寂しな一つ家に、夜毎身に凍む百夜おく霜」と読む。「一ツ家の碑」と呼ばれるこの碑などは、疲れた旅人たちの気持ちを和ませたことであろう。

中山道の後の峠越えの足だった信越線松井田―軽井沢間は廃止されたが、「鉄道文化村」として再生が図られている。歴史の道としての碓氷峠越えも、安中市の「安政の遠足」や松井田町の「中山道ウォークラリー」のように、沿線の市町の各種イベントによって定着し活用がなされている。

（群馬県教育委員会文化財保護課
主幹兼専門員　関口功一）

路傍には数多くの石造物がある



「のぞき」から見た坂本宿

●問い合わせ先
奈良県教育委員会文化財保存課　TEL 0742-22-1101（内線5337，5338）

この道を行く

柳生街道
（奈良県）

柳生街道―〝滝坂の道〟

柳生街道は、奈良と剣豪の里柳生を結ぶ近道として江戸時代に開かれ、今は、東海自然歩道として多くのハイカーに親しまれている。

奈良の街並の東端、破石町バス停から新薬師寺に通じる旧道を進むと、やがて石畳の道が現れる。左手には能登川が流れ、昼なお暗い原生林は、せせらぎの音が静寂を破る滝坂の道となる。

このあたりは、寝仏、夕日観音、四仏、高さが五mもある朝日観音、首切り地蔵など石仏群が続く。ここから道は二つに別れ、右は、新池から地獄谷石窟仏（史跡）に至り、左は春日山石窟仏（史跡）へと続く。やがて二つの道は合流し、細い山道を辿って峠の茶屋に至る。ここでは武芸帳や槍などが展示され往時を彷彿とさせてくれる。茶屋を過ぎると誓多林、大慈仙、忍辱山と集落が続く。これらは、インドの五山に由来する地名と言われている。

やがて、県道を越えて浄土式庭園（名勝）で知られる忍辱山円城寺に至る。

大柳生に入ると、夜支布山口神社を経て、やがて柳生の里に着くと、十兵衛杉、家老屋敷、陣屋跡、報徳禅寺など、かつての柳生藩時代を偲ばせる建造物や遺跡が訪れる人々を迎えてくれる。

（奈良県教育委員会文化財保存課　大塚和章）